

福島市写真美術館企画展

木村 恵一 写真展

2019年4月7日[日]—19日[金]

福島テルサ4階ギャラリー

開館時間=10:00~17:00


(入館は閉館の30分前まで/最終日は12:00まで)

休館日=期間中は無休 入場無料

主催=福島市写真美術館
(福島市教育委員会)

共催=公益財団法人福島市振興公社

後援=福島民報社/福島民友新聞社
福島テレビ/テレビユー福島
ラジオ福島



2010年、撮影中に突然歩行困難になり入院手術、病名は脊髄血腫とのことで半年間の入院後は車椅子生活になり、写真からは暫く離れざるを得なくなりました。その後時折撮影には出掛けてはみるものの、重たい一眼レフを首に下げた行動は思うようになりませんでした。デジタルカメラの発展は高精度で軽量小型のミラーレスカメラをつくり出してくれました。介護の方の力を時折借りつつ、住み慣れた本郷、弥生、根津、千駄木、谷中など半径1キロにも満たない地域を撮り出しましたが、久しぶりに車椅子から見る街の光景は新鮮でした。路上には思わぬ障害もありましたが、街はやさしく私を迎え入れてくれ、くらしを記録する勇気と写真を撮る喜びを再び与えてくれました。心許ない写真の数々ではありますがご高覧頂ければ幸いです。

木村恵一

車椅子からの…

撮影/齋藤康一

木村恵一氏によるギャラリートーク 4月14日[日] 14:00~15:30

「もしもし、アサヒカメラの編集部ですが、貴方の撮った花火の写真が別冊の表紙に決まりました。もし宜しかったら原稿料を受取りがてら編集部遊びに来ませんか」。日大三年生の木村恵一は仲間達を引き連れ欣喜雀躍まだ数寄屋橋の際にあった朝日新聞社に向った。当然、帰りは乾杯、カンパイ。受取った原稿料は仲間達が勝手に言っていた額よりはるかに低い。結局は大赤字。その月の小遣いはゼロ以下。それでも喜んでそんな事をやってしまう彼のおおらかな人柄と性格は今も全く変わっていない。

大学を卒業し、当時母校の教授でもあった写真家渡辺義雄氏の助手となった。そして或る日、「キミ明日からケンチの処に行きなさい」と、仏文学者中島健蔵氏の撮りっぱなし、溜まりに溜ってしまった写真の整理に一年近くも明け暮れた。その後、フリーとなり講談社などなどの仕事。月刊誌、週刊誌のグラビア撮影。なかでも何年か続いた連載「企業の最前線」は、第8回講談社写真賞(現在の講談社出版文化賞)を受賞。受賞パーティの席上この賞の審査員の一人でもあり木村恵一が尊敬してやまない木村伊兵衛氏は「銘木屋の倅は器用な写真を撮ったものだ、味もある……」と氏独特な口調で参会者を沸かせた。

職人気質と言う言葉があるが、東京下谷竹町の銘木屋の息子としての流れもあってか、木村恵一の根底にあるのは職人気質と一徹さ。シリアスなポルターージュ「北朝鮮」。写真集三部作ともなった「京の川」・「京の山」・「京の里」といった一連の京都作品に見られる情緒溢れる表現。被写体となる人々を常にあたたかさで包み込む様な「折々に出会った50人の写真家」を始めとする数多くの人物写真、名手とも言われている街のスナップ。そして「白州の水」で見せた清冽な自然賛歌と、仕事内容は多岐多彩に亘るせいもあって、どれが代表作と言ったらよいか解らない部分もあるが、これは、そうならざるを得ない売れっ子写真家としての宿命とも言えよう。

母校日大の講師、文化センターなどの講師、講演、コンテスト審査、日本写真家協会名誉会員を始めとする団体の役員、等々。「へーさん(仲間からの呼び名)もよく頑張るなあ」と言われている中で最も凄いのが32年間、384回も続いた『日本カメラ』誌のカメラテストレポート。この仕事はスゴイ。病に倒れるまで384種ものカメラやレンズのテストをし、それに添った作品を、表現を変えながら毎月数点も発表し続け、それを完璧にやりこなせるのは木村恵一を置いて他には誰もいないだろう。



木村 恵一(きむら けいいち) 略歴

- 1935年 東京下谷竹町に生まれる。
- 1958年 日本大学芸術学部写真学科を卒業。
卒業後、写真家渡辺義雄写真研究室に在籍。
- 1960年 フリーランスの写真家として独立。週刊誌、月刊誌などを中心にグラフィジャーニズムの分野で活動。
- 1966年 雑誌『週刊現代』で「企業の最前線」躍進する企業のフォルポルターージュを4年間連載。
- 1969年 雑誌『週刊ポスト』写真部デスクとして創刊より参加。
企業ルポ「世界に挑戦する」を連載。
- 1973年 日本大学芸術学部写真学科講師(2010年迄37年間)。
- 1974年 雑誌『江戸っ子』創刊より「江戸—東京伝統の文化」で江戸文化の形と継承する人々を15年間連載。
- 1975年 文部省の委嘱により、日独映像指導者会議で訪独。
- 1978年 雑誌『日本カメラ』誌ニューカメラテストレポート欄を2010年迄32年間(384回)連載。
- 1980年 NHKテレビ、写真講座講師(2年間)。
- 1981年 雑誌『FOCUS』フォトディレクターとして創刊より参加。

■主な個展

- 1972年 「IRON」丸の内ギャラリー
- 1979年 「京の山川里」ニコンサロン(東京・大阪)
- 1987年 「分身妖嬈」キヤノンサロン(東京・大阪・福岡・札幌)
- 1988年 「刺青」紫ギャラリー(東京)
- 1990年 「北朝鮮」キヤノンサロン(東京・大阪・福岡・札幌)
- 1992年 「白州の水」フジフォトサロン(東京)
- 1994年 「京・洛中洛外」JCIIFォトサロン(東京)
- 1997年 「50人の写真家」キヤノンサロン(東京・大阪・福岡・札幌)
- 1999年 「木村恵一の眼」GALLERY 1/f(東京)
- 1999年 「ピバ・イタリア」ギャラリーピコ(東京)
- 2008年 「江戸・東京下町日和」キヤノンギャラリーS(東京)
- 2014年 「江戸の美」ポートレートギャラリー(東京)

■主なグループ展

- 1984年 「六の会展」ナガセフォトサロン、以後フジフォトサロン、ポートレートギャラリーなどで7回
- 1992年 「東京オリンピックの時代」JCIIFォトサロン
- 2001年 「江戸・東京往来」木村恵一・熊切圭介(キヤノンワンダーミュージアム)
- 2004年 「三人展」木村恵一・長友健二・熊切圭介(フジフォトサロン・キヤノンサロン)

■主な出版物

『私と根付』『紙』『京の川』『京の山』『京の里』『ウィスキー博物館』『50人の写真家』『四季旬菜』『江戸東京・下町日和』『北朝鮮』

■受賞

第8回講談社写真賞(現講談社出版文化賞)
公益財団法人日本写真協会功労賞

■コレクション

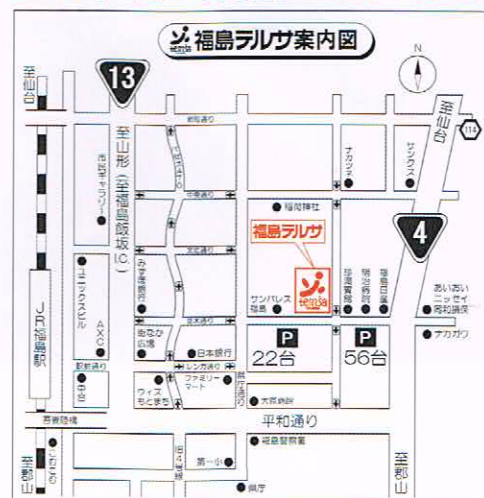
東京都写真美術館、日本大学芸術学部
JCIIFォトサロン、山形美術館

■現在

社団法人日本写真家協会名誉会員
社団法人日本写真協会顧問
全日本写真連盟委員



木村恵一氏によるギャラリートーク 2019年4月14日[日] 14:00~15:30



[福島テルサ: 交通案内] ◆JR福島駅より徒歩10分
◆福島西ICより車で20分 ◆福島飯坂ICより車で15分
〒960-8101 福島市上町4-25 TEL:024(521)1500